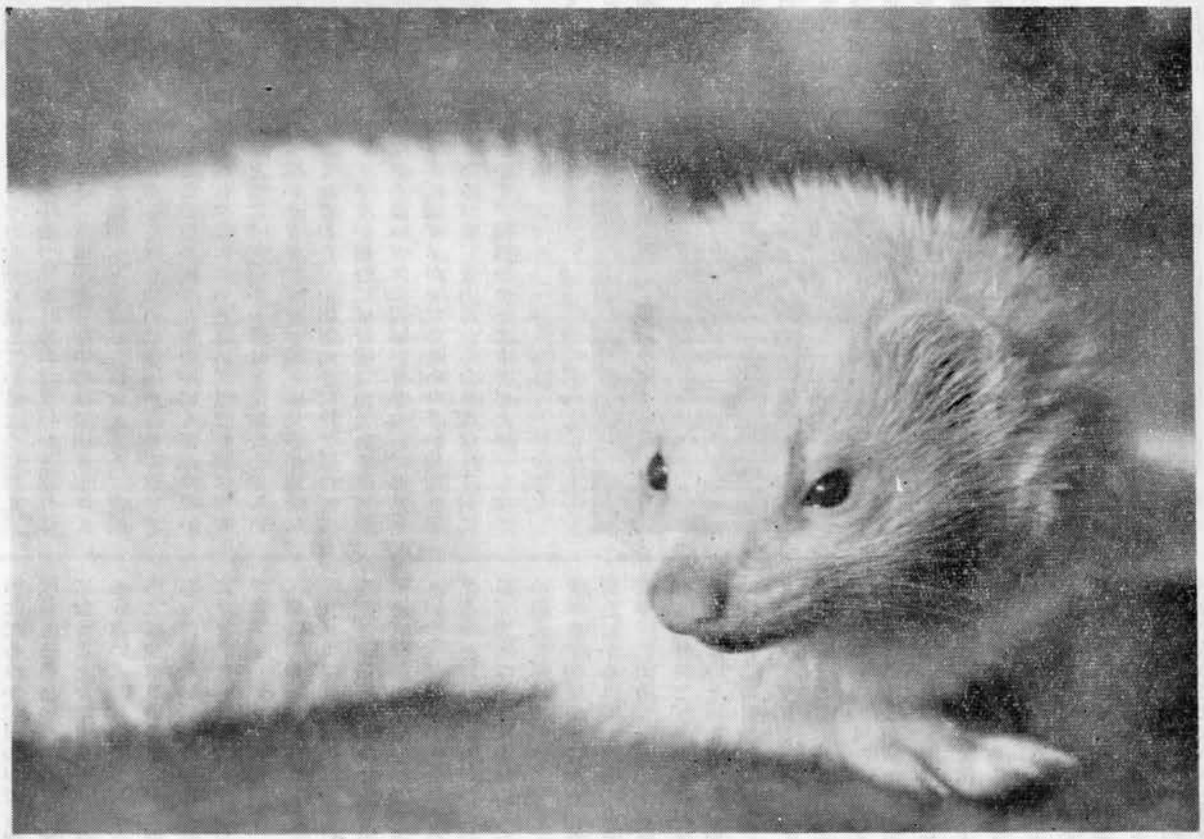
① 毎月1回25日発行　　第3種郵便物認可(昭和35年7月26日)

山と博物館

第8巻 第10号 1963年11月25日 大町山岳博物館



白いイタチ？

白馬山麓の四ツ谷で白いイタチがとれたから引き取ってはくれないかとの連絡があり、どうも少しイタチとは違うようだが……と聞いてみると牛乳をやると喜こんで飲む―、お菓子をやるとバリバリとたべてしまう。それで肉をやると肉も又たべる。まったく変なイタチだという。

飼育していた白馬村役場へ行ってみるとなるほど牛乳の皿もお菓子の食べ残りもある。

金網の中をノソノソと這いまわり、金網に前足をかけて立ちあがったかと思うと、前足をはすして身体をズル〳〵とすべり落す。これがイタチとすればまったくノンビリしたイタチがいるものだと思った。

国立科学博物館の今泉吉典、小林峯生両技官にお聞きいたしたら、外見だけではわからないが多分 Mustela Putorius furo Linnaeus 英名 Ferret（フェレット）に違いないと思うとご返事を頂いた。フェレットはヨーロッパではネズミやウサギを駆除する目的で放し飼いにされているものだそうで、日本には医学用の実験動物として入ってきており、又戦前には毛皮獣として輸入されていたらしく、東京ではトラックにたくさんつんであるのを見た人もあるそうです。

しかしそれがどうして山深い信州の中で獲えられたのかはまだ良くわかりません。近くでこのような動物を飼育している人もいないので。

千葉　彬司

南アルプスの雷鳥

中島克広

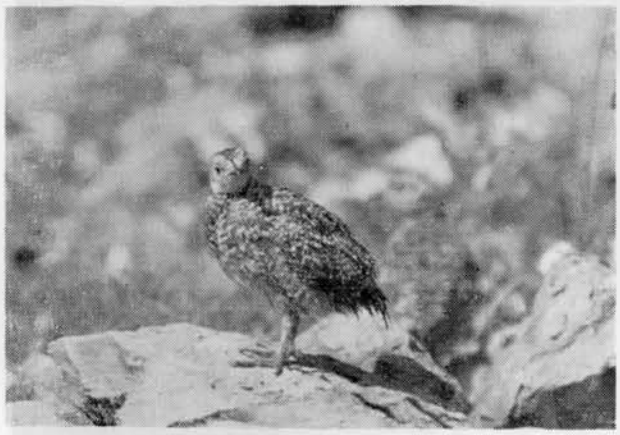
荒川岳の雷鳥親子

荒川岳の南側の登山路の下方にすごく大きなカールがある。有名な仙丈岳のカールに匹敵するほどの規模だ。このカールについてこの夏学術調査がなされたと聞いていたので、前から興味を持っていた。そしてこれを登山路から見おろしたときは、そのすばらしさに目をみはった。それは地形学的なものでなく斜面に広がる緑の大ジュータンがライチョウの生活環境として最上のものであると直感したからである。はやる心をおさえ、浮石の多い斜面を下って一服つけようとして、ふと見ると下方に突き出た妙な石が見える。もしやと思い近ずいて見ると、まさしくメスでありヒナを5羽つれていた。うれしいことにそこから40mほど離れたところにもう一家族が発見できた。

無中でシャッターを切る。しかしヒナは草の中を勝手気ままに動きまわり、一向にファインダーに入ってくれない。入るのは岩の上でガンとして動かないメス親だけ。しかたがないので下からねらおうとすると、メスは急ぎ足で私の前へ前へととびだし、片足をあげ羽をばたつかせ、しきりに凝傷行動をとる。本能とはいうものの親の子に対する愛情にはやほな私もヒナをカメラに収めるのをあきらめて、次第に彼らが遠くなっていくのを眺めていた。

大聖寺平

南アルプスのような大きな山でも、ライチョウの生活できる場所となると稜線近くのわずかな地域に限られてくる。しかし荒川岳から眺めた小赤石――大聖寺平一帯は山全体がライチョウの生活に適しているように思え、どこから手をつけはじめれば良いかと迷うほどである。荒川岳を午前中だけで引き上げて午後は大聖平へと予定していたところ、空模様があやしくなりついには雨が落ちてきた。しかしこの位の雨で小屋の中にくすぶっているのはもったいないと思い、道でも調べておこうとでた。大聖平一帯はお花畑こそ少ないが、低いハイマツ、ガレ地、草地等が適当に入りくんでおり、全体が大きな丘を思わせ、ライチョウが棲むには好適な地であるが、残念ながら濃いガスで視界がきかない。ガイドブックにはガスがでたら迷いやすい場所と記してあるので、登山路から余りはなれる訳にもいかず、視界のきかぬ中をビクビクしながら歩きつづけた。時間にして1時間ほども歩いただろうか、雨の中でも歩けばそれなりの収穫もあるというもの。2家族のライチョウに会うことができた。ヒナは2羽と4羽、少し少ないような気もしたが、環境の良いところにはやはりいるものだと雨にぬれながら感心した。今は朽ちて見あたらぬが以前はここにライチョウの記念碑があったとのことであった。



ライチョウのヒナ

雷鳥の南限〝光岳〟

ライチョウの南限は今までの記録だと南アルプスの最南端の光岳とされているが、ライチョウの数が減少しつつある現在、南限などという生活限界の山ではもう棲息していないだろうというのがおおかたの意見のようである。光岳はどんな山なんだろう、ライチョウの絶えた原因は何か、いや、あわよくばライチョウが発見できるかも知れぬなどと興味と野心にかられて、足を光岳までのばした。

途中、仁田岳、易老岳から眺めた光岳は山全体が森林帯で、あれではライチョウなどすめそうもないと思えた。実際光岳の頂上はオオシラビソにおおわれており、ハイマツも南限とかでタチマツの様相を呈している。しかしわずかにまわりの小さい丘の頭や、センチケ原と呼ばれるハイマツの間のくぼんだ草地など貧弱ではあるが棲んでいるとすれば、その辺位だと「ライチョウ発見」の期待に胸をときめかせ、足を棒にして捜しまわったが、姿はおろか、フンすらみいだすことができなかった。隣の仁田岳、茶臼岳にライチョウが豊富に棲んでいたなら、何時か移り棲むことも考えられるが、少ない現在それも望み薄のようである。しかし私は何んとなくあきらめきれない気持で、もしか、いつかうれしい報告がきけるのではないかと思っている。

ヒナの数によせて

今度の山行で発見できた家族集団は全部で10家族、ヒナの合計は31羽、平均すると1家族3・1羽、61年の北アルプス爺ガ岳の調査結果と比べると1つの家族集団についてはヒナの数は南アルプスの方は1羽ほど多くなっている。しかし、62年爺ガ岳を広範囲に断片調査をしたときにくらべたら逆に1羽ほど少ない。南アルプスの方が成長率が悪いと考えられるが、まだ結論をだすところまでは行っていない。

又ライチョウの成長率の悪さは驚くほどで減少の特に多いのはフ化後40日頃まで、云うまでもなく天敵、テン、キツネ、ヤマイタチ空からはイヌワシ、クマタカに襲われるのである。一度発見されたらそれから逃れることはほとんど困難である。ライチョウの保護増殖もこの40日間をいかに天敵の目から守るかにかかっているものと思う。しかし広い山の中にあっては、人間の手で守る事はむずかしい。ライチョウはキジの仲間であり、しかも産卵数も割合と多いのだからキジのように、飼育―産卵―フ化―育雛を人工的に行ない、山に放すのが一番良い方法ではないかと思う

（福島小学校教諭）

スケッチ

11月27日大町市内は早朝より雪に見まわれ、市内平区、ヤナバスキー場では15cmの積雪で初すべりを楽しむ人もあった。

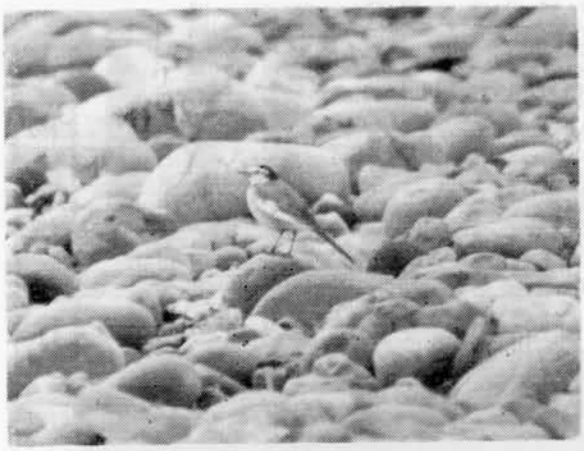
昨年の初雪は11月22日これは雪が舞った程度であったが、同じ26日には7cmの降雪があった。

ハクセキレイ

長沢修介

良く晴れた初冬の或る日、梓川と高瀬川の合流点である明科町の押野崎へ出掛てみた。二つの大きな川の合流点であるため川巾が広くなっており、漂流物が多くあって沢山の鳥達が集っている。

まず一番多く目につくものはこれらの漂流物や汚物を目あてに集るカラスの群である。岸辺か中州に三三五五と集しては食べられそうな物はないかと物色している。上空ではこれもカラスに負けない位のいかもの食いのトビが流れの上をゆっくりと舞っており、時々水面すれすれに急降下して、漂流物を拾っている。このように同じ場所に棲み同じような食物をあさるためトビとカラスは仲が悪い。そして戦を始めるのはいつも決ってカラスの方からで、トビは気にも止めずスルリと体をかわして、うるさいやつだといわんばかりに遠ざかる。岸辺や、中州の水深の浅い所や、少ししか水の流れていない所にはセグロセキレイが一生懸命虫を探している。又数は少なく夏ほどその声に張りもないがキセキレイも小さなチチン、チチンという声を聞かせながら二三羽いるようだ。



ハクセキレイ

先程から目の前の岸辺にキセキレイとは違うがチン、チンとキセキレイに似た様な声がする鳥が一羽来ているが、仰々姿を見つけられず双眼鏡でやっと探し当てたら冬鳥のハクセキレイである。灰色と白の体をしているので川原の石とまぎれて見つけるのにやっとだ動作も他のキセキレイより活発でたえず動き廻っている。キセキレイやセグロセキレイは流れにそった大きな石や土手に止って少し休むことをよくするが、ハクセキレイはじっと動き廻っている。一度急に舞い上り約30メートル位上空でヒラヒラしてたかと思ったら又元の位置に急降下した。この動作は何をしたのか始めは解らなかったが舞い下りた所で石にさかんに何か打ちつけているので双眼鏡で良く見るとトンボであった。この動作は始めは他に移動するために急に高く舞い上ったのだと思ったが本当はトンボを捕える為に舞い上ったのだった。そして一点にヒラヒラして目的のトンボを捕え又元の位置に下りたのだこの動作を見てから、双眼鏡でハクセキレイを良く観察していると、あちこちと活発に歩き廻りながらも、小さな頭を横にして、時々上空を見ていた。も一度、あの見事な曲芸を見せてくれないかと期待しつつ一時間程待ったが、ついにやってくれなかった。そして私の前の岸辺はあきたのかずっと下流へ飛び去ってしまった。

渋右エ門と天狗の土産

長沢武

猿倉からヤリ温泉への途中に小日向山という山があります。ここは夏でもジメジメしたまことに道の悪い、嫌な所で、少し下ったところには、これまたその昔主天坊から硫黄を里へ運ぶ途中ガスで滝つぼへ落ち三日三晩助けを呼ぶ声が聞えたという六左エ門滝や、ヤリ温泉引湯中、白馬岳遭難史上最大の惨事を起した三次郎の雪渓がありますが、ここに双子岩という岩があります。この岩には人が入れる程大きな穴があって、昔から誰言うとなく天狗様が棲んでいる、という白馬岳には珍らしい宗教的伝説があり、里人は恐れてここへ近ずこうとしませんでした。

青鬼の住人(一説には小谷の人)渋右エ門は当時ここらかいわいでは隋一の鉄砲打ちでした。

夏は百姓仕事をし、雪が降ると毎日獲物を追っての生活でしたが、若い血気盛んな彼は村の老人からそんな話を聞くにつけ、そんなばかなことがあるもんか、俺が一つこの目で見きわめてやろう、ということになりました。

彼は朝日にキラキラ輝く雪の原を見通しに細野まで出、二股を越えて小日向山に向いました。人一倍足の早い彼も雪深い小日向山には手まどり日の入る頃ようやく双子岩につきました。穴の中に用意してきたローソクに火をつけて鉄砲片手に奥へ奥へと進みました。穴の深さはどれ位か、はうようにしてローソクの火をたよりに進む彼もなんだか次第に心細く、恐しくなってきました。すっと奥のうす明るい所からうなり声とも読経とも解らぬ異様な声が聞えてくる。その声がはたと止んだと思うと彼の前には天狗が現われた。彼は「猟に来たが道に迷ったから一晩泊めてくれ」と頼み、天狗もそれを了承一夜の宿をすごすことになりました。夕食には大きな盃に彼の大好きなボタ餅が一ぱい出され、たら腹喰いました。その夜は別段なんのこともなく翌朝となりました。渋右エ門は天狗に別れをつげて帰ろうとすると、天狗は奥より昨夜の残りのボタ餅を持って来、「雪山の天気は解らない、これを持って行って腹がへったらくえ、ただし二股から下へ持って行ってはならぬぞ、それからこの弾はお前の身が危くなった時に撃て、それ以外には絶対に使ってはならぬぞ、よいか」とボタ餅と一緒に鉄砲の弾を一つくれました。

渋右エ門は天狗の好意に感謝し別れをつげて一さんに山をかけ下りました。

二股についてボタ餅を口にしようとしたがいやまてまて、話の材料に持って帰って皆に喰わしてやろうと考えなおして開いた袋をまたしまい家に帰りました。その夜彼の家で武勇伝を聞いた後開いたボタ餅はどうでしょう、袋の中は河原の石三つが入っていただけでした。

そんなことがあってから幾年かたちました。渋右エ門の腕はますますさえ彼に鉄砲を向けられた獲物は必ずたおれる程になりました。或時、彼は一人で雪の戸隠の奥山に泊りました。その夜眠っている彼の上に巨大な荷物がのって、どうしても息ができません。青ざめて行く彼の頭に何時か天狗からもらった弾のことが浮びました。

彼は急ぎ弾をつめて引きがねを引くとたしかに手ごたえあって魔物は消え、息ができるようになりました。生血でべっとりした自分のかたわらには、それこそ八畳敷もある大コウモリの死体があったとのことです。

(山博調査員・白馬村公民館)

博物館だより

安曇の歴史展終る

11月1日～13日まで大町市恒例の文化祭に博物館では安曇の歴史展を開催した。

この12日間の入場者数四四五四人。

この展示に際して次の人々のご協力を得て行なわれた。紙上より厚くお礼申し上げる。

市内平区　仁科祐雄、同　西沢昌一、市内窪田ちえ子、同　平林悦夫　同　栗林ふさ江　同　曽根原正一郎、同社区　高橋靖、市内、曽根原仁士、松本市　伊藤一美、市内　合木豊一郎、市内　矢口小豊、松本市　千国昌美　松本市　県ケ丘高校、市内社区　内川重雄、同　内川金市、小谷村　山田寛、市内　アララギ衣料店、松本市立博物館

（順不同、敬称略）

〃青太郎〃死ぬ

青森県大畑営林署で保護されていたカモシカ幼体〃青太郎〃は、全日本空輸KKや国鉄その他多くの人々の善意と協力で9月15日大町へ移送された。

しかし　その後発育悪く腸疾患や関接炎に悩まされ11月18日午前3時9分、館員にみとられて死んだ。

死因その他の詳細な調査は家畜保健所で行なっている。

東家完成

当博物館庭にあった東家は老朽したのでこのたび新しいものにした。北アの連山を見わたせる素晴しい位置にあり、晴れた日は遠く白馬岳・五竜岳・鹿島槍・連華・大天井・清水岳などの連山が雪を頂いているのが望める

ヒマラヤ　ギャチュン・カンへ

明年度全日本山岳連盟の海外登山代表に選ばれた、長野県山岳連盟はヒマラヤの未登峰ギャチュン・カン（七九二二メートル）に遠征することになり「大町山の会」より古原和美・武田武の両氏が参加することになった。

ギャチュン・カンは、エヴェレストの北西方約二十一キロ、ネパールとチベットの国境線上にある北峰と南峰がそびえ最高ピークは北峰（七九二二メートル）で、こんどの遠征はこの北峰をねらう。出発は明年一月末、先発四人は空路カルカッタに向け出発し、本隊八人は二月上旬空路で向い二月九日頃先発と合流してカトマンズに入る。

シェルパ十人、ポーター二百人のキャラバンは三月上旬登山基地ナムチェ・バザールに到着。頂上アタックは五月上旬、天候条件により第四次攻撃遂までくりだす予定。

古原和美氏（40）医博、大町保健所長、山岳博物館協議会委員、大町山の会、長野県山岳連盟会長、一九五八年ジュガール・ヒマールランタン・ヒマール一帯の探索に参加。今度の遠征隊長であるとともに医務担当。（右）

武田武氏（30）松本市高山理化精機、山岳博物館協議会委員、大町山の会、県岳連指導委員会委員長、北アルプス鹿島槍、唐沢岳、爺ガ岳のバリエイションルート開拓遠征隊では、記録と装備担当（左）

郷土史年表　12月のできごと

天正12年（一五八四）富山城主佐々成政は安曇郡に入り筑摩、伊那を経て浜松にでる。

文政8年（一八二五）四カ庄（現白馬村）凶作で百姓一揆（き）起る。15日は大町池田で乱暴、16日穂高新田で侵掠し松本藩の討伐にあい退散。同じ18日小谷にも騒動があった。

慶応3年（一八六七）王政復古の大詔発せられる。

明治2年（一八六九）組並びに大庄屋以下村役人廃止になり、大名主、名主、頭組頭をおく。

明治5年（一八七二）陰暦を廃止して大陽暦となる。

明治10年（一八七七）大町区裁判所設置、翌年一月より事務を取りあつかう。

明治14年（一八八一）本郡役所、大町字天神原に新築が指定される。

明治15年（一八八二）郡役所、大町警察署新築落成

明治19年（一八八六）大町警察署は独立池田千国の2分署を配下に、池田分署の下に広津巡査巡出所を置く。

明治38年（一九〇五）大町婦人会設立

明治40年（一九〇七）小谷地方地震

明治40年（一九〇七）南安曇郡の焼岳が噴火郡の南部に灰が降る。

大正6年（一九一七）平村（現平区）鹿島9戸17棟を焼失、鹿島分教場も焼ける

『山と博』4ページに

山と博物館は一九五五年創刊されて以来8年、この博物館とともに歩きつづけてきた。

その間、夏期ライチョウ調査、冬期ライチョウ調査、あるいは白馬岳史、コマクサ調査等々……山博の歩みの詳細を伝えてきた。

大町市は一九六〇年、地財法の準用を受けそれは教育関係予算の削減となって現われ、山と博物館の発行も危ぶまれたが、そのつど周囲の暖かい支援により継続することができた。そして博物館は創立10周年を迎えた。記念号発行を計画したものの発行の目途もつかないまま過ぎようとした折も周囲の支援によりカラー表紙30余ページのものが発行でき記念祭に花を添えることができた。ここ一、二年少い予算、その上物価上昇にともない印刷費の値上げ、休刊する月がでた。そして本月より4ページになった。「山と博」の予算はわずかな額かも知れないが本館の事業予算内においてはトップである。しかし、この予算でも休刊の月が出又4ページにしなければならなくなって来る。

読者の皆様に実情をお知り頂き、暖かいご支援とご協力をお願いするものである。

お願い　本紙の購読ご希望の方は**一カ年購読料三〇〇円（郵送料とも）**を現金書留または**郵便為替、郵便切手で長野県大町市、大町山岳博物館**あてご送金下さい。

山と博物館　第八巻　第十号
一九六三年十一月二十五日発行
発行所　長野県大町市TEL（大町）二一一
大町山岳博物館
印刷所　大町市上仲町
信州印刷大町工場